

定價三〇錢、地人書館發行(米倉)

彙報

○京都帝國大學文學部史學科

本年度講義題目

正科目

國史

普通 西田 教授 國史概説(第一部)

中村(直)助教 國史概説(第二部)

特殊 西田 教授 日本近世文化史料研究(實習)

藤助 教授 武家社會の研究

喜田 講師 日本先住民族の研究

魚澄 講師 室町幕府と諸豪族

三品 講師 朝鮮通史

出雲路講師 有職故實

演習 西田 教授 日本思想史の研究

東洋史

普通 羽田 教授 東洋史概説(第一部)

那波助 教授 東洋史概説(第二部)

特殊 羽田 教授 東方に於ける胡人の活動

那波助 教授 唐代に行はれたる外國風俗

が上梓された本書は經濟地理學界は勿論一般好學者を裨益する所
少くないであらう。全篇を六章に分ち第一章に於ては經濟地理學
の本質と職能を論ず。先づ斯學の發達を地理學、經濟學、實用の
三方面より綜括し、その本質職能に就いては現代諸大家の見解を
並記してゐるが、經濟地理學は地表に分布する經濟的文化現象を
自然環境と經濟人との間に行はるゝ相互作用の原理に基き、地域
的に因果的に研究する文化科學であるとなしてゐる。第二章は經
濟地域論で主としてデイトリッヒに従つて諸種の地域設定法を
述べたる後國家又その聯合である經濟ブロックの如き政治的區劃
によるを最も便宜であるとされる。第三章の生産地理は立地に關
する諸問題を解説したる後農、林、牧、水産、鑛、工の各部門に
互つて要領よく概説されてゐる。第四章は商業地理で最も多くの
頁を之に費され、貿易の諸問題を經濟地理の立場から明快に論述
された。第五章は交通地理で陸上、水上、空中の交通、港灣等が
論ぜられ、第六章は人口の分布と移動に就き、人口地理、聚落地
理、植民地理的考察がなされてゐる。この最後の節は植民發向の
型をフエニシア・ギリシア型、ローマ型、ゲルマニヤ型、モンゴ
ール・タタール型、シナ型、ニッポン型に分類して述べたもので
最も獨創に富んでゐる。

著者は序文に、本書は現代の經濟地理學に於ける中庸なる學說
を平易に紹介したに過ぎないと謙遜されてゐるが、各所に著者の
識見や蘊蓄のひらめきが感ぜられる。行文平易、明快、活字の大
きさ、圖版の組み方何れも適當で氣持がよい。(菊判二四三頁、

岡崎 講師 六朝時代史 (三〇)

鴛淵 講師 清の太祖の蒙古経略 (四〇)

杉本 講師 安南史 (二〇)

三品 講師 朝鮮通史 二

濱田 教授 東亞上代の美術 二

演習 羽田 教授 東洋史の諸問題 二

西洋史 二

普通 原(隨) 教授 西洋史概説(第一部) 二

時野谷 教授 西洋史概説(第二部) 二

特殊 時野谷 教授 アイルランド問題の推移 二

原(隨) 教授 希臘政治思想史 一

千代田 講師 第十八世紀の史學史 (三〇)

井上 講師 羅馬共和政時代の政治的社會的發展 二

梅原助 教授 クリートの考古學的遺蹟遺物 二

演習 時野谷 教授 第十八、九世紀西洋政治史上の重要問題 一

原(隨) 教授 ギリシヤ精神の傳來 二

史學研究法 一

原(隨) 教授 史學研究法 一

地理學 二

普通 小牧助 教授 地理學通論(第一部) 二

中村(新) 教授 地理學通論(第二部) 二

特殊 小牧助 教授 海岸の地理學的研究 二

小野 講師 地圖學 二

田中 講師 植民地理學及び滿蒙地理 三

演習 小牧助 教授 内外地誌演習 二

實習 小牧助 教授 地理學實習 二

考古學 二

普通 濱田 教授 考古學概説 二

特殊 濱田 教授 東亞上代の美術 二

梅原助 教授 クリートの考古學的遺蹟遺物 二

演習 濱田 教授 考古學的の諸問題 二

實習 梅原助 教授 考古學實習 二

副科目

國史 中村助 教授 日本古文書學概論 一

柴田 講師 日本近世史料講讀 二

宮地 講師 神祇史 (二五)

宇野 講師 神道研究 (一五)

東洋史 二

羽田 教授 東洋史籍講讀 一

那波助 教授 同 一

西洋史 二

講讀 時野谷 教授 Ranke, Über die Epochen der neueren Geschichte 一

地理學 二

二

二

小野 講師	獨逸地理書講讀	1			
考 古 學					
濱 田 教授	考古學英書講讀	1	田 中 教授	{H. Tanaka, Graecae Grammaticae Rudimenta (第一回) Lib. II Xenophon, Anabasis, Homeros, Odyssea, Lib. I (第二回)}	2
美 術 史			波多野 教授	Platon, Phaidon	2
源 講 師	日本彫刻史(哲學科講義)	2	田 中 教授	{Sophokles, Antigone Sophokles, Oidipous Tyrannos (第三回)}	1
佛 教 史			羅 旬 語		
禿 氏 講 師	日本佛教史(哲學科講義)	2			
英 語			支 那 語		
中 西 講 師	M. Arnold, Essays in Criticism.	2	徐 講 師	杉武夫宮越健太郎共著 支那語教科書(第一回)	2
Ashton 講 師	W. H. Hudson, Apopt in England.	2	支 那 語		
獨 語			支 那 語		
石 川 講 師	柏谷眞洋編、初級用獨逸小文典 (第一回)	2			
雪 山 講 師	T. Storm, Der Schimmelreiter. (第二回)	10			
石 川 講 師	Hans Carossa Führung und geleit (同)	1			
佛 語			傳 講 師	現代小説 卷二 (第二回) 經譯須知 卷二 (第三回) 儒林外史 卷三	1
伊 吹 講 師	貴志忠直編、初級佛文法教科書 吉松發一編、現代佛蘭西語讀本(初級用) (第一回)	2	露 語	親 杉貞利、露西亞語文法 十時准 ソヴイエイトロシア語新讀本 (第一回) プーシューキン、ルズランとリウドミ (第二回)	2
落 合 助 教 授	{Nakahira, Lectures moyennes Hakusuisa, Lectures du français de tous les jours (第二回)}	2	十 時 講 師		1
希 臘 語					

伊 語
黒田 講師 伊語初歩

教 育 學

長 田 講師 教育學概論(哲學科講義)

(四〇)

〇史學研究會

例會 五月十六日(土)午後一時半より文學部陳列館第一教室に於てその講演あり、午後五時頃閉會。

一、遼代に於ける都市の發達

秋貞宗造氏

(全文追て本紙上に掲載すべきにつき梗概を略す)

一、歴史意識の成立

高山岩男氏

歴史意識が成立するためには、先づ時間的なもの・非合理的なもの、ものが考へられねばならぬ。

此の故に、例へば現實を永遠化し合理的なものを實在と考へた古代ギリシヤ人や、また現實を否定して彼岸・永遠を求めることによつて歴史的世界から逃避した古代インド人に於いては、當然歴史意識が脱落してゐた。之に對して、神のものとケイザルのものとの對立・合理的な神と非合理的な人間意欲との交錯を考へ罪の觀念を有つたヘブライ人や、現世的なものと天上的なもの・天の道と人の道の交流を考へた古代支那人に於いて始めて歴史意識が成立した。勿論、ヘブライ思想は直線的であり且つそれにとつては終末觀が缺くべからざるものであるのに對して、支那思想は圓環的であり、また前者が宗教的であるのに對して後者が倫理的であると云ふ様な特質が考へられるが、然し何れにしても、彼岸

的なものと現實との交錯するところに「歴史意識」が考へられるのである。

ヘブライ思想との關係に於いて考へられる中世の歴史意識に於いては、神の意志が中心となつてゐたが、近世に於いてはその「神の意志」に代つて「人間性」が中心に考へられてゐる。此の點に於いてそれはヘレニズム思想の復活と云へるが此のフマニタスが、漸次純粹化せられ、全く人格的なもののみを意味することになつてくる。そこでフマニタスと云ふ超越的原理と現實との交錯——そこに近代の歴史意識が考へられる。その代表的なものは一ヘゲルの歴史哲學であり、それは人間の中にありつゝ人間を一步越えるものを考へる。新カント派に於いては、時間的なものと永遠的なもの・相對的なものと絕對的なものとの對立が考へられてゐる。斯くて、およそ歴史意識が成立するためには、現實的・時間的なもののみでは充分でなく、また反對に超越的・永遠的なもの——これを「神」となすか、「倫理的なもの」とするか、「自由」と考へるか、又はその他の何ものかと考へるかは歴史的に變化するが、いづれにしても斯かる超越的・永遠的なもの——のみでも充分ではない。此の兩者の交錯がなければならぬ。地上的なもの・人間的なもの・動物的なものと、之に對して神・自由・フマニタスがなければならぬ。然し、此の兩者は無媒介的にあるのではない。何らの關聯もなしに存するのではない。天・神・人格的なもの等も、實は動物的なものうちに存するのである。

人間のなものでもなく、神のものでもない。同時にそれらであ

つて、それらではない——かゝるものと人間意識との交錯するところに、歴史意識が生れるのである。

○讀史會

六月例会 六月九日(火)午後七時より樂友會館に於て開會、西田教授、中村・藤南助教授、柴田講師を初め四十名出席、先づ柴田講師より讀史會の沿革につき御説明があつた後、左の如き研究發表並びに御講話があり、最後に西田教授の御感想を伺つて午後十時半散會。

一、日本先住民族の表現性について

二回生 鶴田忠正氏

一、山槐記の著者に就いて

三回生 木越 宏氏

一、談話

三回生 高谷重夫氏

一、能樂座の江戸止住

中村直勝先生

○西洋史讀書會

例会 本年度第一回例會は二回生諸君の歡迎會を兼ね五月七日午後六時より京都アパートに於て開催、一同食堂に於て晚餐を共にしたる後、先輩諸兄の談話あり十時散會、出席者、時野谷、原兩教授を始め二十四名。

○地理學談話會

例会 五月二十日於地理學實習室。

一、見島雜觀

衣川 芳太郎氏

山口縣萩市の沖合(北北西、約四十軒)に位置する見島に就いて

旅行談に話をされた。

二、地理學史瑣談

室賀信夫氏
徳川時代の地人相關論的な思想の發達に就いて述べられ、その手懸りとして、並河誠所を選び彼の思想を中心に議論を展開された。

三、伊吹山の藥草に就いて

田中秀作氏

伊吹山の藥草殊にモグサに就いて先づその歴史的な發達から説き起し、現在も何故伊吹山麓にモグサ製造業が維持されてゐるか云ふことを説明された。(安藤)

○東洋史談話會

新入學生歡迎會 五月四日夕 於寺町いろは

第五十回例会 五月二十五日夕 於學生集會所

金の山西經略に就いて

外山軍治氏

商代發跡於渤海説について

森 鹿 三氏

○支那學會

新入學生歡迎會 五月九日夕 於學生集會所

例会 五月三十日午後二時 於文學部第一演習室

蘇州音と支那音韻學者

小川環樹氏

支那旅行談

内藤乾吉氏

會報

○會員動靜

入會

廣島市翠町一四八二ノ二
廣島文理科大學東洋史研究室
同右

今堀誠二氏
藤岡繁人氏
坂東文雄氏

(以上篤淵一氏紹介)

東京市小石川區茗荷谷町一〇二

木村方
福澤宗吉氏

(百高殿氏紹介)

大阪市東淀川區長柄東通二丁目

鶴滿寺内
福岡明成氏

(野上俊靜氏紹介)

京都市上京區河原町荒神口東入

杉本龜次郎方
藤技温良氏

京都市左京區山端上高野上荒蒔野町一〇

田中安次方
弘津 德氏

(以上田中達男氏紹介)

京都市左京區岡崎西福ノ川町二五和田卯之助方

岡本良一氏

京都市左京區淨土寺南田町一九〇

澤井文吉方
池川聰雄氏

長岡市東神田町一一六三

笠井方
若林喜三郎氏

京都市左京區吉田二本松町

土坂方
藤谷 惺氏

大津市石山寺邊町

村松 寛氏

大阪市北區會根崎上四ノ五

越川正啓氏

京都市左京區吉田本町五

山鹿方
清原宜雄氏

京都市右京區松尾井戸町

笹川新一氏

朝鮮釜山大廳町四ノ二五

竹林方
北村篤太郎氏

東京市品川區東大崎四丁目

立正大學歷史研究會

(以上前川貞次郎氏紹介)

轉居

福岡氏藥院六〇四

竹岡勝也氏

濱松市廣澤町三一三

武内キヌ方
前島又次氏

新義州公立高等普通學校

稅田利秋氏

滿洲國撫順北臺町二丁目四ノ六

久原市次氏

福岡市地行東町一番町十七

上野臺次氏

○寄贈交換圖書雜誌目錄

黑板勝美著

資料 摘錄國史概觀

吉川弘文館

釋瓢齋著

法隆寺俗談

鵜故郷舎

吉田十郎編

法隆寺金石文

同

東洋文庫地方志目錄

東洋文庫

史學雜誌 四七ノ三、四、五、六

東大史學會

歷史地理 六七ノ四、五、六

日本歷史地理學會

史學 一四ノ四、一五ノ一

三田史學會

史淵 十二

九大史學會

人類學雜誌 五一ノ三、四、五附錄

東京人類學會

社會經濟史學 五ノ十二、六ノ一

社會經濟史學會

考古學雜誌	二六ノ三、四、五	考古學會	九ノ四
史迹と美術	七ノ五、六、七	史迹美術同攻會	三二ノ一
文 化	三ノ三、四、五	東北帝大文科會	
郷土信 濃	五ノ三、四、五	信濃郷土研究會	
經濟論叢	四二ノ四、五、六	京大經濟學會	
國學院雜誌	四二ノ四、五、六	國學院大學	
社會學徒	十ノ四、五、六	社會學徒社	
青丘學叢	二二、二三	青丘學會	
夢 殿	一、二、五、六、七、八、九、		
史學研究	八ノ一	廣島史學研究會	
國 史 學	二六	國 史 學 會	
商業と經濟	十六ノ二	長崎高商研究會	
皇 學	四ノ一	神宮皇學館	
北海道經濟史研究	一	北海道經濟史研究所	
國民精神文化	一ノ三、四	國民精神文化研究所	
臺大文學	一ノ二	臺北帝大短歌會	
民族學研究	二ノ二	日本民族學會	
專修學報	三	知恩院專修道場	
日本文化	五、六	天理圖書館	
瓜 茄	三	奥村伊九良	
東方學報	東京第六冊	東方文化東京研究所	
東洋史會紀要	一	東 洋 史 會	

國立北平圖書館々 九ノ四
 通 報 三二ノ一
 國立北平圖書館
 べリオ氏

Mitteilungen de Seminars für Jahr- Fr.-Wilhelms-Universität
 gang 37, 38, Orientalische Sprachen

お 断 り

本號は紙數超加の爲豫定原稿の一部を一旦組版しながら次
 號にまはさなければならなかつた。執筆者及印刷所に對し
 惡しからず諒恕を請ふところである。(編者)